

## 図書館の障害者サービス：和光大学の場合（特集 身体障害者サービス）

著者	沢里 冬子
雑誌名	大学の図書館
巻	16
号	1
ページ	6-7
発行年	1997-01-25
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1073/00003776/">http://id.nii.ac.jp/1073/00003776/</a>

\*\*\*\*\*  
**特集 身体障害者サービス**

**図書館の障害者サービス  
—和光大学の場合—**

沢里 冬子

\*\*\*\*\*  
はじめに

和光大学は1966年に開学し、以来障害をもつ学生に門戸を開いている。とは言っても、和光大学が開学当初から障害を持つ学生が学ぶのに最適な環境だった訳ではなく、また、開学以来30年を経過した現在でもいろいろな課題をかかえている。

かつて、スロープも、エレベーターもない不十分な環境の中で、人と人とのつながりを大切にしながら、苦勞して学ぶ学生がいて、徐々にスロープができ、図書館の対面朗読サービスがはじまり、新しい建物が建築されるときには、段差を解消し、エレベーターを設置しと改善がはかられ、サービス面でも徐々に前進しながら今日に到っている。

大学では

和光大学の「本学における現状の施設・設備で勉強できるならば、細かな条件をつけることも、特別な配慮をすることもなく、一般学生と同じように受け入れる」という障害者学生受入の理念のもと、現在では、約40名程の様々な障害を持つ学生が共に学んでいる。大学では、受験時に、そして学生生活に関して様々な対応がなされている。

たとえば、受験時には、障害の種類や、程度に応じての対応がなされている。視覚障害者の場合は、点字受験、試験時間延長、拡大鏡・ワープロ等の使用など、聴覚障害者の場合は、板書、メモなどにより伝達事項もれのないようにするなど、肢体障害者、病弱者の場合、別室受験（医務室受験を含む）、拡大

答案用紙の使用、車椅子、カーペットなどの使用、試験時間延長等々が実施されている。

入学時オリエンテーションでは、関係学生サークル等の協力で、手話通訳、OHPの使用が行なわれている。

授業においては、1992年度から、ノートテイキング・システムが始められた。学生からノートテイカーを募り、限定されたコマ数のなかで、ノートテイキングを希望する聴覚障害学生との組合せをつくって実施し、それに対してノートテイカーに一定の謝礼を出すという方式である。1・2年生が3コマ、3・4年生が2コマのノートテイクサービスを受けることができ、ノートテイカーへの謝礼は、1コマ（1年間）に対して、2万円である。1・2年生が3コマ、3・4年生が2コマと一見逆のようにみえるが、これについてノートテイキング・システム開始時の大学通信の文章には”限られた予算のためということもあるが、それよりも依然として、いやいよいよゼミ等では「共に学ぶ」関係を創りあってその中でやりくりしていこうという思いも込めている。”と書かれている。

また、授業科目として、「手話・点字とコミュニケーション」「スポーツ研究、障害者の体育・スポーツ」などが開講されている。

様々な条件や、制約があるなかでの学生・教員・職員の努力によって現在に到っているが、20年ほど前から、「障害者学生の学内生活に関する懇談会」が開催されていて、そこで話し合ったことがらは尊重され、大学運営上に反映されるようになっている。

図書館では

和光大学附属梅根記念図書館は、”だれもが使いやすい図書館づくり”をめざして、新独立図書館として1984年4月に開館し、1994年4月に増築され現在にいたっている。

図書館建築にあたっては、段差のない床、

メインエントランス・トイレ入口の自動ドア化、大学で初めてのエレベーター（音声案内付き、ドアの開閉をゆっくりetc.）の設置、ローカウンター、書架・通路の間隔をできるだけ広くなどの実現につとめた。後に、入口にBDSを導入するときにも、車椅子等でも通りやすいように間隔を広くし、パーも取り外したものを設置した。

現在、図書館のサービスとして制度化されているのは、対面朗読サービスである。4月に学生から、朗読者を募り、利用者と朗読者双方の希望時間（授業時間に合わせて設定している）の調整を図書館の担当者が行い一年間ペアを組んで実施する。朗読者には、朗読だけでなく図書館利用全般にわたるサポートを重要な役割として果してもらっている。これらの仕事に対して、年間3万6千円の朗読料が支払われている。1996年度の、対面朗読サービス利用者は、11名、27コマで、朗読者は27名である。このほか、図書館員による予約制の朗読サービスも実施しているが、最近では利用の申込は少ない。（和光大学の視覚障害者サービスについては、図書館雑誌、V.88, no.7、「和光大学図書館における視覚障害者サービス」－石谷エリ子文－に詳しく記されているので参照していただきたい）

カウンターでは、随時、代行検索や、資料探し、ワープロで打ち出した漢字変換文字の点検など依頼に応じて対応しているが、朗読者や、友人などのサポートもあってかさほど多い件数ではない。

また、1室ある点字パソコン室の利用は、ここ数年とても多くなり、現在の設備では、利用に対応しきれなくなっていて、改善の希望が学生から出されている。

#### 図書館のこれから

最近テレビの朝のニュースで、本のページをスキャナーで読み込んで音声で表現する機

器が紹介されていたが、機器の進歩には目を見はるものがある。が、わたしたちの、大学の状況はどうだろうか？

ここ10年来和光大学も世間の動きと無縁ではなく、特に図書館の機械化、そして図書資料の遡及入力とサービスの基盤の整備にと多くのエネルギーをそそいできた。

そのことのメリットも多々出現してきているが、こと障害者サービスに関しては1972年にスタートした対面朗読サービスの充実はあるものの様々な障害を持つ学生に対するサービスについては必要性は感じているものの、実現できないでいる。カウンターで、様々な障害をもつ学生と接していて、点字パソコンが使える図書館員がいれば、手話のできる図書館員がいればと思うことも多い。

1984年に現在の場所に開館して以来、“だれもが使いやすい図書館づくり”をめざして日々カウンター等での努力は続けられてはいるものの、障害をもつ学生への図書館側のPR不足や、学生の状況、要求を把握しきれていないなど多くの課題をかかえている。図書館の機械化が一段落した現在、利用者サービスの改善に目を向け、充実をはかる時期にきているとも言える。

しかし、世の中は情報社会へと進展し、図書館のサービスも大きく変わろうとしている。機械化、ネットワーク化、そして電子化へと進んで行こうとしている環境の中で、新たな図書館サービスを考える時、変化の激しい中でこそ、足元をみつめ、あらためて“だれもが使いやすい図書館づくり”を基本に前進したいと思う。

（さわさと・ふゆこ

／和光大学附属梅根記念図書館）